

パネルディスカッション B

小野 有五氏報告へのコメント

平川 一臣*

北海道の自然環境問題を考える際に重要な視点は、過去100年かそこらの短期間のうちに、人間が森林から主に農耕地へと、まさに“劇的に”変えてしまったことである。このような変化に自然はいかに応答するかという問題を含めて、自然環境問題に対する（自然）地理学の役割について参考になる事例を2つあげる。このような事例から、研究のプライオリティーについて考えることが、われわれ研究者には求められているのではなかろうか。

1. 突堤（漁港）建設に伴う海岸浸食の急速化

十勝の太平洋に面した海岸では、突堤建設以降の過去約25年間、毎年1m ずつ海食崖が後退するようになった。その対策として大量の消波ブロック（テトラポット）が投入されているが、消耗は速い。一方陸上では防霧林育成と称して植林事業が進められている。しかし、幼樹は育つ前に海岸浸食によって海にのまれてゆく。これらは異なる担当部署による公共事業である。これでは公共事業の“競演”，“いちごっこ”であり，“公共事業費”を使うために事業を行っているようなものである。自然は“システム”として捉えることが必要であることに無知・無関心な現れである。自然地理学の研究者としては、突堤を建設すれば海岸の地形学的プロセスはどのように応答するかについて、研究、知見をもとに一般市民に広く知ってもらい、様々な場、機会を通じて提言することが大切である。

2. 開墾・森林伐採がもたらした河川環境の急激な変化

晩成社の活動に始まる十勝地方の開墾は、人類

史上例を見ないような速さと規模で森林を農地に変えた。その結果、河川はまったく別の河川に変わってしまった。当縁川など十勝平野・豊頃丘陵周辺の中小河川流域では開墾とほぼ同時に大量の土壌が浸食され、河川に運ばれ、下流域に堆積したり、太平洋に流れ去った。それによる地形変化の速さは、50年間程度で、顕著な自然堤防の地形を発達させたほどである。とりわけ、近年は、洪水・氾濫が頻発するようになっている。自然地理学、地形学、第四紀学の課題，“義務”のひとつとして、このような変化過程の実態についての基礎的な研究を基にして、森林破壊、土地の人為的改変はどのような影響をもたらすか、自然はいかに応答するかについて具体的に警告、提言すべきことを指摘しておく。

* 北海道大学大学院地球環境科学研究科